

Title	日本語における属格主語を持つ節のサイズ
Author(s)	包, 麗娜
Citation	日本語・日本文化研究. 23 P.83-P.93
Issue Date	2013-12-20
Text Version	publisher
URL	<a href="http://hdl.handle.net/11094/26918">http://hdl.handle.net/11094/26918</a>
DOI	
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

# 日本語における属格主語を持つ節のサイズ

包 麗 娜

## 1. はじめに

日本語における主格・属格交替現象は、Harada (1971)以来、統語理論研究において、重要なトピックとなってきた。主な理由は二つある。一つは、いかなる環境において、属格主語が認可されるかという問題を提起するという理由、もう一つは、関係節の構造・サイズは、主格主語の場合と、属格主語の場合とで、同じであるか、異なるかという問題を提起するという理由である。本稿では、二つ目の問題に焦点を当て、属格主語を持つ関係節のサイズは、最大で、Focus Phrase (FocP)であると主張する。これは、Akaso and Haraguchi (2011)の提案、かつ、Miyagawa (2013)の提案と異なるが、この両提案を土台に、新たに提案されるものである。

本論文の構成は、以下の通りである。2節で、3節以降の議論のための背景として、これまでに提案された属格主語の認可条件と、属格主語をもつ関係節に関するサイズを概観する。3節で、Miyagawa (2001)のデータから派生される新たなデータを提示し、4節で、そのデータが、何を示唆するかを考察する。最後に、5節で結語を述べる。

## 2. 背景

主格・属格交替現象は、Harada (1971)によって、最初に指摘された。例(1)において、関係節内の主語「卵」は、主格の「が」、あるいは、属格の「の」によってマークされてよい。

(1) [土曜日に 卵が/の 安い] 店は、この店です。

その後、この現象は、数々の言語学者に扱われてきた。その中で、主要な3つの属格主語認可に対するアプローチを概観する。Miyagawa (1993)/Maki and Uchibori (2008)のD認可アプローチ、Watanabe (1996)/Hiraiwa (2001)のFin (連体形+Fin) 認可アプローチ、そして、Miyagawa (2013)のv認可アプローチである。<sup>1</sup> D認可アプローチとFin認可アプローチは、(1)における属格主語「卵の」を、それぞれ、「店」(N+D)、述語「安い」の連体形+音形のないFinによって、認可する。また、v認可アプローチは、例(2)において、従属節内部のvが、属格主語「雨の」を認可する。

(2) 太郎は、[雨が/の やむ] まで、旅館に いた。

(2)においては、従属節内部の述語の時制は、主節の時制によって決定され、また、従属節

内部の述語は、非対格述語である。Miyagawa (2013)は、このタイプの属格を、従属時制属格 (genitive of dependent tense (GDT)) と呼び、属格主語は、*v*によって、認可されると主張している。ただし、(2)において、Hiraiwa (2001)によるFin認可アプローチも、従属節内部の属格主語を認可する。本稿では、便宜的に、Hiraiwa (2001)によるFin認可アプローチ(3)を仮定する。(但し、後に、(3)は、改訂される。)

(3) 日本語における属格主語認可条件

属格主語は、述語の連体形 (+Fin) と局所的な関係になくてはならない。

次に、認可条件(3)では、それらが非文であるにも関わらず、誤って正しい文であると予測してしまうデータを見る。それらのデータは、強調/焦点の「だけ」を含んでいる。Horie and Saito (1996) と Akaso and Haraguchi (2011)は、以下のデータを提示している。

(4) [昨日 山田さんだけが/\*の たのんだ] 料理は、エスカルゴ料理 でした。  
(Horie and Saito (1996))

(5) [昨日 太郎だけが/\*の 飲んだ] 薬 (Akaso and Haraguchi (2011))

このデータに基づき、Horie and Saito (1996)は、一般化(6)を、また、Akaso and Haraguchi (2011)は、関係節の構造に関する提案(7)を提示している。

(6) もし、「が」でマークされた主語が、埋め込み文の焦点であれば、が・の交替は、適用できない。  
(Horie and Saito (1996))

(7) 属格主語を持つ関係節は、焦点を含む場合、Focus Phrase (FP)まで投射できず、Tense Phrase (TP)である。  
(Akaso and Haraguchi (2011))

一般化(6)は、明瞭である。(7)は、次のことを示している。焦点は、Focus Phrase の指定部で認可を受ける。もし、焦点を持つ関係節が、主格主語を持つ場合、その関係節は、(8)のように、FocP となり、また、属格主語を持つ場合、その関係節は、(9)のように、TP となり、その結果、焦点が認可される主要部がなくなり、非文となる。

(8) [<sub>FocP</sub> [<sub>TP</sub> NP-だけ-Nom...]] N

(9) \* [<sub>TP</sub> NP-だけ-Gen...]] N

### 3. データ

上記の背景を基に、Miyagawa (2001)のデータとそれから派生されるデータを考察する。Miyagawa (2001)は、数量詞「全員」と否定辞「ない」の関係を詳細に調査し、単文、あるいは、「よ/と 思う」に先行する文において、主語に「全員」が来ると、文は、全否定の意味しかもたず、部分否定の意味を持たないと論じている。例(10)を見よ。

- (10) 全員が 遊ば なかった (よ/と 思う)。<sup>2</sup>  
 \*not > all, all > not (Miyagawa (2001, 例(22)))

ところが、その構造が、関係節に埋め込まれると、状況が変わってくる。例(11)を見よ。

- (11) [DP [<sub>FinP</sub> 全員が e 読ま なかった] 本]  
 not > all, (all > not) (Miyagawa (2001, 例(23)))

例(11)において、「本」を修飾する関係節の内部に、「全員が読まなかった」が埋め込まれており、例(10)では見られなかった部分否定の意味が現れる。この事実に基づき、Miyagawa (2001)は、否定辞「ない」が、「全員」をc統御する位置まで、上昇していると論じている。具体的には、例(11)において、関係節が、FinPであり、そのCの位置まで、否定辞が上昇し、「全員」をc統御している。これによって、部分否定の意味が現れる。

ここで注意したいのは、関係節内部の主語が主格であるということである。Miyagawa (2011)は、関係節内部の主語が属格であるデータを考察していない。例(12)を見よ。<sup>3</sup>

- (12) [DP [<sub>FinP</sub> 全員の e 読ま なかった] 本]  
 ?\*not > all, all > not

例(12)においては、例(11)で得られるような「全員」の部分否定の意味が、極めて得にくい。少なくとも、「全員」の部分否定の意味が、例(11)と例(12)において、同じ程度に得られるとは言えない。そこで、両例において、差があると仮定する。もし、例(12)の構造が、例(11)の構造と同様であれば、つまり、FinPであれば、否定辞がFinにまで上昇することが予測され、例(12)において、「全員」が、部分否定の意味を持たないということが説明できない。したがって、例(12)の事実は、属格主語を持つ関係節は、FinPであってはならないということを示している。

では、その範疇は、Akaso and Haraguchi (2011)が主張するように、TPであるかどうかを検証する必要がある。その検証のために、例(13)-(16)を見よ。

- (13) 土曜日に、全員が 読ま なかった 本  
not > all, (all > not)
- (14) 土曜日に、全員の 読ま なかった 本  
\*not > all, all > not
- (15) 土曜日にだけ、全員が 読ま なかった 本  
not > all, (all > not)
- (16) 土曜日にだけ、全員の 読ま なかった 本  
\*not > all, all > not

例(13)-(14)には、副詞句「土曜日に」が関係節の文頭に置かれている。例(13)では、関係節の主語「全員」は、主格でマークされ、部分否定の意味を持つ。例(14)では、関係節の主語「全員」は、属格でマークされ、部分否定の意味は、例(12)と同様に、極めて得にくい。一方、例(15)-(16)には、副詞句「土曜日に」に、焦点「だけ」が付加され、焦点句「土曜日にだけ」が関係節の先頭に置かれている。例(15)では、関係節の主語「全員」は、主格でマークされ、例(13)と同様に、部分否定の意味を持つ。例(16)では、関係節の主語「全員」は、属格でマークされ、部分否定の意味は、例(14)と同様に、極めて得にくい。ただし、ここで重要なのは、例(16)が、その解釈に関わらず、文法的であるという事実である。例(16)には、焦点句があるため、それを認可するために、関係節は、TPより大きくなければならない。つまり、属格主語と焦点句を持つ関係節のサイズは、TPを超えて、FocPでなければならない。「全員」の解釈と無関係の例においても、同様のことが言える。例(17)を見よ。

- (17) [土曜日にだけ 卵が/の 安い] 店は、この店です。

例(17)は、関係節に焦点句「土曜日にだけ」を持ち、その主語が、属格であっても、文法的文である。このように、Miyagawa (2001)のデータとそれから派生されるデータを考察することで、属格を持つ関係節のサイズは、TPを超え、FocPにまで拡大されるということが明らかになった。

#### 4. 考察

前節で、以下の結論(18)に達した。

(18) 日本語において、属格を持つ関係節のサイズは、FocPにまで拡大される。

本節では、この結論が、日本語統語理論に、どのような含意を持つか、考察する。

まず第一に、結論(18)が正しければ、本稿で、便宜的に、仮定していたHiraiwa (2001)によるFin認可アプローチ(3)に改訂が必要となる。

(3) 日本語における属格主語認可条件

属格主語は、述語の連体形 (+Fin) と局所的な関係になくてはならない。

属格を持つ関係節が Fin を持つと、例(12)において、否定辞が Fin まで上昇し、「全員」の部分否定の解釈が、誤って可能となってしまうからである。

(12) [DP<sub>FinP</sub> 全員の e 読ま なかった] 本]

?\*not > all, all > not

したがって、(3)は、(19)のように、Finを排除した形に修正されなければならない。

(19) 日本語における属格主語認可条件

属格主語は、述語の連体形と局所的な関係になくてはならない。

そうすると、Hiraiwa (2001)で提案された、日本語の属格主語の認可には、音形がなく、接辞的なFinは、寄与しないことになる。さらには、そのようなFinは、存在しない可能性もあることになる。よって、Hiraiwa (2001)の仮説の内部では、属格主語の認可には、V(+v)+Tの連体形のみが関与していることになる。また、例(2)のタイプのデータ以外では、この連体形認可アプローチとMiyagawa (1993)/Maki and Uchibori (2008)が提案しているD認可アプローチが扱うデータの範囲は、同値と言える。ただし、ここで興味深いのは、例(2)における動詞「やむ」の連体形は、そもそも、何によって認可されているかということである。

「まで」の統語範疇の決定は、それほど単純ではないため、本稿では、特定の範疇を想定しないが、それが何であれ、なぜ、この統語環境で、連体形が許容されるのか、それ自体は、重要な問題であり、今後の調査に委ねることとする。

第二に、Focus Phrase (FocP)の主要部Focは、それがc統御するTPの主要部Tを牽引(Attract)しないが、Fin Phrase(FinP)の主要部Finは、それがc統御するTPの主要部Tを牽引するということである。前節の例(11)で見たように、主格を持つ関係節は、FinPで、その内部にある否定辞は、Finにまで上昇する。

- (11) [DP<sub>[FinP]</sub> 全員が e 読ま なかった] 本]  
not > all, (all > not) (Miyagawa (2001, 例(23)))

そうでなければ、「全員」の部分否定の解釈が予測できない。これを踏まえて、属格主語と焦点句を持つ例(16)を再度考えてみる。焦点句がLFにおいて、FocP SPECに移動する以前の構造は、(20)に示される。

- (16) 土曜日にだけ、全員の 読ま なかった 本  
\*not > all, all > not

- (20) [DP<sub>[FocP]</sub> [TP 土曜日にだけ、全員の 読ま なかった] Foc] 本]  
\*not > all, all > not

構造(20)において、焦点句の認可のために、「土曜日にだけ」がFocP SPECにLFで移動し、他の操作は、一切生じていないとすれば、例(16)が「全員」の部分否定の解釈を持たないことが正しく予測できる。しかしながら、構造(20)は、例(11)の構造と、抽象的レベルでは、酷似している。例(11)の構造を(21)に示す。

- (21) [DP<sub>[FinP]</sub> [TP 全員が e 読ま なかった] Fin] 本]  
not > all, (all > not)

構造(21)において、否定辞が、Finまで上昇すると、その否定辞は、「全員」をc統御することになり、部分否定の解釈が得られる。同様に、構造(20)においても、否定辞が、Focまで上昇すると、その否定辞は、「全員」をc統御することになり、部分否定の解釈が、誤って、得られることになってしまう。そうすると、例(16)が「全員」の部分否定の解釈を持たないという事実は、否定辞が上昇する条件を示していることになる。つまり、Finは、否定辞を牽引する能力がある一方、Foc自体は、否定辞を牽引する能力がないということである。別の言い方をすれば、否定辞は、Finと一致するが、Focとは、一致しないということである。この背後にある、より根源的原理については、現段階では、明確にできないが、少なくとも、FinとFocとの間に、何らかの素性における決定的相違があることを、上記データは、示している。

第三に、属格主語は、LF表示において、TP内部に留まらなければならない。つまり、Tと一致し、さらに、Tに対して局所的な位置にいないければ、認可されない。Miyagawa (2013)は、日本語には、2種類の属格主語があると提案している。その提案は、(22)に要約される。

- (22) 日本語における2種類の属格主語
- a. Dによって認可されるもの：FinPは、その関係節に存在せず、TPだけが存在し、その内部に生じ、全ての述語とともに生ずる。
  - b. vによって認可されるもの（従属時制属格主語（genitive of dependent tense (GDT)））：FinPの中で生じ、非対格述語、受動態述語とともに、また、一定の他動詞の目的語に、生ずる。 (Miyagawa (2013))

本稿では、(22a)の提案を修正し、属格主語は、FocP内部に生ずると論じている。以下では、(22b)を一旦仮定し、それが提起する問題について考察する。まず、上記で見たように、従属時制属格主語は、例(2)のような環境で生ずる。(2)における従属節は、FinPであると仮定されているので、例(23)に見られるように、副詞「越前海岸で」をその従属節の先頭に置いてもよい。

- (23) 太郎は、[越前海岸で 雨が/の やむ] まで、旅館に いた。<sup>4</sup>

さらに、(23)においては、例(24)に見られるように、焦点句「越前海岸でだけ」を、その先頭に置いてもよいので、その従属節は、FocPを含んでも良い。

- (24) 太郎は、[越前海岸でだけ 雨が/の やむ] まで、旅館に いた。

これらを背景に、例(25)を見よ。例(25)では、焦点句「雨だけ」を含んでいる。

- (25) 太郎は、[越前海岸で 雨だけが/\*の やむ] まで、旅館に いた。

例(25)は、従属節内部に、動詞「やむ」を使用しているため、その主語が主格主語「雨だけが」であっても、意味的に、ある程度違和感があるが、例えば、越前海岸では、雨が降る時には、あられや雪も同時に降ることが頻繁にあるとすると、あられや雪が降り続けていても、雨だけがやむという状況を想定すれば、その意味的違和感は、緩和され、その文は、統語的には、なんら問題ないことが分かる。ところが、その主語が属格主語「雨だけの」の場合、その文は、明らかに非文である。

同様の差が、例(26)-(27)においても観察される。例(26)-(27)では、従属節内部の述語は、受動態述語である。まず、例(26)に見られるように、焦点句「音楽のクラスでだけ」を、従属節内部の先頭に置いた場合、主格主語であっても、属格主語であっても、その文は、文法的である。

- (26) 太郎は、[音楽のクラスでだけ 花子が/の 褒められる] まで、辛抱強く待っていた。

例(27)では、従属節内部の主語が主格主語「花子だけが」であれば、意味的に、ある程度違和感があるものの、その文は、統語的には、なんら問題ない。ところが、その主語が属格主語「花子だけの」の場合、その文は、明らかに非文である。<sup>5</sup>

- (27) 太郎は、[音楽のクラスで 花子だけが/\*の 褒められる] まで、辛抱強く待っていた。

これらの事実は、(22b)の一般化と合致しない。

- (22) 日本語における2種類の属格主語  
b.  $v$ によって認可されるもの（従属時制属格主語（genitive of dependent tense (GDT)））：FinPの中で生じ、非対格述語、受動態述語とともに、また、一定の他動詞の目的語に、生ずる。 (Miyagawa (2013))

では、上記の例(25)と例(27)は、何を示唆するであろうか？これらのデータは、少なくとも、記述的には、(28)を示唆している。

- (28) 日本語における属格主語は、LF表示において、TP内部に留まらなければならない。

例(25)と例(27)は、焦点句を含んでいるため、その認可のために、ForceP内部にFocPを持たなければならない。そうすると、その従属節の構造は、抽象的には、(29)のようになる。

- (29) a. [DP [<sub>ForceP</sub> [<sub>FocP</sub> [<sub>TP</sub> [<sub>vP</sub> NP-だけ-Gen...]  $v$ ] Foc] まで=Force] (基底構造)  
b. [DP [<sub>ForceP</sub> [<sub>FocP</sub> NP-だけ-Gen [<sub>TP</sub> [<sub>vP</sub> ~~NP-だけ-Gen...~~]  $v$ ] Foc] まで=Force] (LF構造)

(29b)においては、属格主語が、TPの外に出、FocP SPECに移動している。この属格主語は、従属時制属格主語であるので、(22b)によって、 $v$ によって認可されている。にもかかわらず、一旦、TPを超え、FocP SPECに移動すると、非文になる。このことから、日本語における属格主語は、少なくとも、TP内部にLF表示で留まっていなければ、非適格となる

と言える。つまり、これは、Horie and Saito (1996)の一般化(6)が予測することと同じで、したがって、(6)は、記述的には、正確であると言える。

(6) もし、「が」でマークされた主語が、埋め込み文の焦点であれば、が・の交替は、適用できない。 (Horie and Saito (1996))

そうすると、Akaso and Haraguchi (2011)の例(5)が非文であるという事実も、一般化(28)/(6)と合致する。

(5) [昨日 太郎だけが/\*の 飲んだ] 薬 (Akaso and Haraguchi (2011))

Akaso and Haraguchi (2011)は、例(5)が属格主語である場合、その文は、非文であるという事実から、属格主語を持つ関係節の構造は、TPであると主張したが、従属時制属格主語をもつ例(25)と例(27)も非文法的であることから、その構造が、FinP/ForcePであっても、非文となる場合があることになり、関係節がTPであるかどうかは、重要ではなくなる。より重要な事実は、これらの非文全てにおいて、属格主語が、LF表示において、TPの外にあるということである。この一般化(28)の背後にあるより根源的原理については、現段階では、明確にできないが、少なくとも、属格主語は、従属時制属格主語であるかどうかに関わらず、Tと一致し、さらに、Tに対して局所的な位置にいないければ、認可されないということを示唆している。

もしこれが正しければ、(22a)の属格認可に関する一般化は、Dが関与しているというより、Tが関与しているというべきかもしれないことを示唆している。

- (22) 日本語における2種類の属格主語
- a. Dによって認可されるもの : FinPは、その関係節に存在せず、TPだけが存在し、その内部に生じ、全ての述語とともに生ずる。

というのも、上述したように、例(2)のタイプのデータ以外では、Hiraiwa (2001)が提唱している連体形認可アプローチの改訂版(19)とMiyagawa (1993)/Maki and Uchibori (2008)が提案しているD認可アプローチが扱うデータの範囲は、同値と言えるからである。

- (19) 日本語における属格主語認可条件
- 属格主語は、述語の連体形と局所的な関係になくてはならない。

もし上記の議論が正しければ、日本語統語論における属格認可条件に関する一般化は、(19)と(28)の2点となることになる。

- (28) 日本語における属格主語は、LF表示において、TP内部に留まらなければならない。  
い。

## 5. 結語

本稿では、日本語における主格・属格交替現象に関する新たなデータを発見し、それに基づき、以下の3点を提案した。

- (18) 日本語において、属格を持つ関係節のサイズは、FocPにまで拡大される。
- (19) 日本語における属格主語認可条件  
属格主語は、述語の連体形と局所的な関係になくてはならない。
- (28) 日本語における属格主語は、LF表示において、TP内部に留まらなければならない。  
い。

## 参考文献

- Akaso, Naoyuki and Tomoko Haraguchi (2011) "On the Categorical Status of Japanese Relative Clauses," *English Linguistics* 28, 91–106.
- Harada, Shin-Ichi (1971) "Ga-No Conversion and Ideolectal Variations in Japanese," *Gengo Kenkyu* 60, 25–38.
- Hiraiwa, Ken (2001) "On Nominative-Genitive Conversion," *MIT Working Papers in Linguistics 39: A Few from Building E39*, ed. by Elena Guerzoni and Ora Matushansky, 66–125.
- Horie, Kaoru and Noriko Saito (1996) "A Pragmatic Constraint on Particle Conversion in Japanese," paper presented at the 70th Annual Meeting of the Linguistic Society of America.
- Maki, Hideki and Asako Uchibori (2008) "Ga/No Conversion," *Handbook of Japanese Linguistics*, ed. by Shigeru Miyagawa and Mamoru Saito, 192–216, Oxford University Press, Oxford.
- Miyagawa, Shigeru (1993) "Case-Checking and Minimal Link Condition," *MIT Working Papers in Linguistics 19: Papers on Case and Agreement II*, ed. by Colin Phillips, 213–254.
- Miyagawa, Shigeru (2001) "The EPP, Scrambling, and Wh-in-situ," *Ken Hale: A Life in Language*, ed. by Michael Kenstowicz, 293–338, MIT Press, Cambridge, Mass.
- Miyagawa, Shigeru (2013) "Strong Uniformity and Ga/No Conversion," *English Linguistics* 30, 1–24.
- Rizzi, Luigi (2004) "Locality and Left Periphery," *Structures and Beyond: The Cartography of Syntactic Structures, Volume 3*, ed. by Adriana Belletti, 223–251, Oxford University Press,

Oxford.

Watanabe, Akira (1996) “Nominative-Genitive Conversion and Agreement in Japanese: A Cross-Linguistic Perspective,” *Journal of East Asian Linguistics* 5, 373–410.

### 謝辞

本稿を執筆するに当たって、長谷部めぐみ氏、牧秀樹氏、三原健一氏の助言を仰いだ。この場を借りて感謝申し上げる。ただし、本稿におけるいかなる不備も筆者の責任である。

### 註

<sup>1</sup> Hiraiwa (2001)は、実際は、C(連体形+COMP)認可アプローチを提案している。Rizzi (2004)によるカートグラフィーの観点からすると、Hiraiwa (2001)における COMP は、正確には、Fin である。(三原健一氏(私信))本稿では、Rizzi (2004)に従い、従来の CP を、ForceP > FocusP > FinP と仮定し、FinP の下に、TP が生ずると仮定する。TopP は、本稿の議論と関係がないため、省略する。また、本稿においては、他の著者によって CP と仮定されている範疇を、混乱が起きないように、FinP、あるいは、ForceP と置き換えて記述する。

<sup>2</sup> 例(10)の判断は、日本語母語話者によって異なり、人によっては、「全員」が、部分否定の意味を持つことがある。(三原健一氏(私信))本稿では、Miyagawa (2001)の判断を採用する。

<sup>3</sup> 例(12)は、長谷部めぐみ氏・牧秀樹氏(私信)による。

<sup>4</sup> 例(23)-(27)は、三原健一氏(私信)による。

<sup>5</sup> 同様に、例(i)に見られるように、関係節内において、主格目的語は、「だけ」と共起できるが、属格目的語は、できない。(三原健一氏(私信))。

(i) [昨日、太郎に 甘いものだけが/\*の 食べられた] 理由